慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	マルク・ブロック : 人と業績
Sub Title	Life and works of Marc Bloch
Author	渡辺, 国広
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1957
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.50, No.7 (1957. 7) ,p.631(79)- 643(91)
JaLC DOI	10.14991/001.19570701-0079
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19570701-0079

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

㈡　さて、最後に、「資本の集積・集中と分裂・分散」の両傾向が、独占資本主義段階において、いかに貫徹するかについて、ごく簡単に展望を述べよう。

まず、ここで考察した資本の集積・集中と分裂・分散の傾向は、独占資本主義段階でも基本的には、そのまま貫徹していることが強調されねばならない。すなわち、一方において、（競争が存在する限り）あらゆる部門で、大資本による小資本のたえざる駆逐が行われる。ここで注意さるべきは、小資本分野における集積・集中が、その部門における相対的により大なる資本の漸進的集積・集中＝大資本への成長という過程――資本主義の上昇期にはかなり一般的だった――を通ることなく、有利な中小資本部門への独占資本乃至、大資本の侵入という形をとることが多くなることであるが、そこでも、より大なる資本による、より小なる資本の駆逐・破滅・吸引がそのまま貫徹するわけである。

他方において、それに反対する傾向、すなわち、小資本の執拗な残存、及びあらたな小資本分野のたえざる発生が行われる。

それ故、独占資本主義段階における小資本の残存乃至新生は、まず資本制生産の発展そのものの傾向としてとらえられねばならないのであって、独占資本成立の影響から出発してはならないのである。

もちろん独占資本成立の生みだす新たな諸条件は、資本の集積・集中と分裂・分散に対して、何らかの影響を与えるであろう。それ故、本論で展開したことに若干の修正が加えられるべきである。独占段階における変化の諸要因は非常に複雑であるが、とくに、独占価格の成立と下請制的支配の広汎化による複雑な影響が仔細に検討されるべきである。その上ではじめて、まえに引用した「独占資本は産業資本主義段階における大資本のようには、中小資本を淘汰し去ろうとはしない」ということが、いかなる意味で、又、いかなる限定の上でいわれうるかが明確になろう。その点の詳細な分析は、独占資本主義段階における中小工業問題の全面的検討とともに、後日に期している。

――一九五七・五・一――

資料

マルク・ブロック*

――人と業績――

渡辺国広

一

わが国にブロックの名が知られて久しい。彼ほど親しまれたフランスの史家はない。ブロックが有名になったのは農業史についての業績によってであった。戦後は歴史理論を中心にいくつか紹介がなされた。その彼がレジスタンスの犠牲となり、倒れて十年以上たった。第二次大戦でフランスがなくした人物のなかで、彼の死は最大の犠牲であった。レジスタンスでフランスが払ったこの高価な犠牲は誰をも落胆させずにおかなかった。

彼は一八八六年リヨンに生れた。父グスタヴはそこの大学の文学部で古代史の教授であった。彼が生れて直後、父は高等師範学校の講師に任命され、家族はパリに移った。後に父はローマ史の教授としてソルボンヌに迎えられ、退職する一九一九年まで在任した。学者として著名な父は同時に彼を指導した最初の先生でもあった。母もまた彼の教育には熱心であった。ブロックの学問的成功はこの父母におう。大抵の著作の冒頭に出ている献辞は両親に対する深い感謝でつづられている。(一)

一九〇四年ブロックは高等師範学校にはいった。入隊で学業を中断し、一九〇八年歴史と地理の授業資格を得た。それから一年ドイツに留学し、ライプチヒとベルリンの大学で勉学した。終えてパリにもどり、一九〇九年以来ティエル研究所で学位論文の作成に没頭し、三年後の一九一二年そこを出て、一九一四年まで地方の中学校で教師をつとめた。この時期はパリ育ちの彼がフランスの地方農村について見聞をひろめる貴重な機会となった。

ブロックは中世農村の研究に取組み、中学校に奉職してからも、ティエル研究所の三年間で集めた史料を基礎に、引続きその完成に向って努力した。地方誌の刊行はその間の副産物であった。(二) しかし第一次大戦の勃発で研究を中止し、戦場におもむいた。武勲に輝き、大尉にまで昇進した。その間に四度の感状を受け、またレジョン・ドヌール勲章を得た。休戦と共にストラスブール大学の再建を託さ

れ、とくに選ばれて文学部で中世史の講師となった。かたわら、戦争で中断を余儀なくされた学位論文の計画を、最初予定した通り進めていった。しかし実際にソルボンヌに提出されたのは、彼の最初の予定と大分違った。最初の計画ででき上るべきものを主論文とすれば、それは副論文であった。一三一五年と一三一八年に発せられた二つの解放状を史料としての研究で、カペー朝の農民対策の解明をめざした。(二) これにより彼は一九二〇年学位を得た。

中世農村の研究を進めてゆくかたわら、ブロックは教授としてさち多い生活を送ることができた。(四) 彼がもっとも長く在任したのはストラスブール大学であった。ストラスブール大学が中世史研究の一大中心として整備されるようになったのは彼におう。また彼がルシィアン・フェーヴルと会い、歴史の新しい概念を普及するための共同の仕事に乗出したのもそこに在職中であった。(五) もっとひろい、もっと人間的な歴史を彼等はめざした。そしてこの努力は、一九三三年フェーヴルがコレジ・ドゥ・フランスの教授となり、また一九三六年ブロックがソルボンヌの教授となって、二人がパリに相会して後も続けられた。

ソルボンヌに移ってからブロックは研究の対象をひろげ、中世に限らず、近世史にも興味を持つようになった。その意味でソルボンヌ転出は彼の学究生活の新しい出発点となった。しかしそこでの研究は三年で終った。第二次大戦に従軍したためである。敗北で軍籍を離れてからは、ストラスブール大学に逃れ、次いでモンペリエ大学に移った。(六) やがてここも去り、一切の教職から離れて南仏の別荘にともった。しかし一九四三年にはこの生活も捨ててレジスタンスの運動に投じ、縦横の活躍にはいっていった。

* マルク・ブロックの生涯と業績についてはすでに研究も多い。主要なものとしては L. Febvre, De l'histoire au martyre, Annales d'histoire sociale, 1945; G. Altman, Au temps de la clandestinité: notre《Narbonne》de la Resistance, Ibid; L. Febvre, Marc Bloch et Strasbourg: Faculté des Lettres de l'université de strasbourg; Mémorial desannées 1939-1945, Paris, 1947; R. Boutruche, Marc Bloch vu par ses élèves, Ibid; Ch. E. Perrin, l'œuvre de Marc Bloch, Revue historique, 1948, t. 199.

(一) 例えば学位論文 Rois et serfs の扉には「父に、その教え子から」とある。また一九四一年五月ブロックは、そのころ彼が書いていた Métier d'historien がいつか刊行されるならば、その扉に「母の思い出のために」と書く積りであることを公言したという。Annales, 1945, p. 31 参照。

(二) L'Ile-de-France. Les pays autour de Paris, Paris, 1913, 136 p.

(三) Rois et serfs. Un chapitre d'histoire capétienne, Paris, 1920, 224 p.

(四) ストラスブール大学におけるブロックについては Febvre, L. Marc Bloch et Strasbourg. Souvenirs d'une grande histoire; Mémorial des années 1939-1945 (Publications de la Faculté des lettres de Strasbourg), Paris, 1947, p. 170-193 にくわしい。

(五) 一九二九年二人はそのために Annales d'histoire économique et sociale を創刊した。この雑誌は幾度か表題を変え、一九四六年以降は Annales. (Économies Sociétés Civilisations) として刊行されている。

(六) このとき以来ブロックは原稿の発表に際し M. Fugères なる偽名を使用している。

二

精力的な研究者としてブロックは多く著作をのこした。(一) しかも業績は多面にわたり、概観することが困難なほどであった。彼は中世史家であり、社会史家であり、経済学者であり、また農業史家であった。しかもそのいずれにおいても第一人者をもって聞えた。

中世の農民対策を中心に学位論文をまとめて後、はやくもブロックは諸王に伝わる瘰癧の治療法に関する厖大な研究を刊行した。(二) しかしその後は再び農村史の研究にもどった。彼においては特に隷農身分が問題となり、業績としては、中世の隷農を古代の奴隷と同一視することに異説を唱えたもの、(三) カロリンガ朝の下級貴族について論じたもの、(四) 中世の自由と隷従の問題を一般的に取上げたもの(五) が目立った。それらを通じての特徴的な傾向は、研究の地域をフランスに限らず、比較史の立場をめざしていた点にあった。しかし彼の農村史研究の主たる関心は中世のフランスにあった。一九三一年の著作(六) はそのことを示す。彼の努力はこの書において見事に結実された。しかし彼自身は非常な不満で、一九三九年には改訂の意図をフェーヴルに告げている。(七) しかし自身で果すことができなかった。ブロックの遺志は同僚ドゥーヴェルニュを中心に一九五六年の補足版(八) の刊行となって生かされた。また一九三〇年の論文(九) と、農業制度を法制的観点からまとめ上げた一篇(一〇) は、近世農村を扱った研究として重要な意味を持つ。

中世史家としてのブロックの関心は農村の階級から、中世社会の諸階級にまで拡大していった。その成果は二巻の著書となって一九三九年以来刊行され始めた。(一一) 比較史の立場はそこでも貫ぬかれ、ヨーロッパという大きなわくのなかで封建社会が見事に浮彫りされていた。ほかに、中世研究の主要な業績としては、貨幣と技術について打出された種々な研究が目立つ。(一二)

比較史の方法をとる場合、ブロックがフランスと対比せしめようとしたのはドイツであった。彼のドイツ史についての重要な知識は、ストラスブール大学でドイツの中世史料を整理したことによって養われた。講義の必要からとはいえ、彼自身ドイツについて一つの論文をまとめている。(一三) また、ドイツで刊行される研究書を紹介し

ていくことによって、[一四]彼はドイツ史についての知識を確実なものとした。しかしもっと重要なことは、この文献解題を引受けることによって、彼の歴史家としての立場を示す機会に恵まれたことであった。彼は書評を続けながら、第一次大戦後の混乱期に国民主義へ向ったドイツ人の情熱に対し深い敬意を捧げた。しかし後にこの感情はゆがめられ、学問研究の分野においてもその反響が現われたことを指摘した。とくにナチが擡頭してからは、歴史の研究においても誤った国民主義が横行し、外国人の研究が無視され、比較史の立場が蔑視されるようになったことを彼は悲しんだ。それは歴史研究においてもっとも排斥すべき傾向であった。ブロックにとってナチは、みのり豊かな他の多くの革命と違って、ドイツの学問発展に対し有害な影響しか持たなかったと信ぜられた。[一五]

しかしブロックはナチの影響こい著作を列挙するだけにとどまらない。はやくより彼は、歴史研究を前進させるもっとも適切な方法について強い信念を持ち、更にそれを強化していった。彼にとってその方法は比較史の立場であり、彼はこの方法が言語学において既に真価を発揮していることを示した。[一六]しかし歴史についての彼の思想を体系的に知るためには、一九四一年の著作[一七]によらなければならない。

ブロックの著述活動について触れて、彼が第二次大戦の敗北の直後に書き、彼の死後に発表された著書に触れないことは、不当であろう。彼は一九三九年志願して従軍し、西部戦線の司令部に配属された。ドイツ軍の攻撃を避けて司令部はイギリスに移り、まもなくノルマンディーにもどった。彼は司令部と行動を共にした。しかし追われて、ランヌで捕虜となった。まもなく釈放され、難を避けて南仏にいる家族のもとに帰った。一九四六年に刊行されて注目を浴びた遺著はいわばこの間の体験記であった。[一八]

要点は、戦場での経験を反省して、敗北の原因を考えてみようというところにあった。彼はその原因の若干が軍部の誤った戦争指導にあったといった。しかし彼によれば、原因の大部分は国民全体にあった。そして、公共心の欠如、教育制度の欠陥、指導階級の無気力、産業界の無知が指摘された。従って単なる体験記と違う。それは偉大な歴史家だけがなし得る貴重な現状分析の書であった。ブロックによれば、真の歴史家は、現在のよりよき理解のために過去の研究に従う。従って真の歴史家は、彼と直接の関係がある現実の問題について炯眼を持つはずであった。この書は、真の歴史家たるべく努力を続けたブロックのみが書き得る真の歴史書でもあったわけである。

知られるごとく、過去と現在を結びつけて考えるすぐれた能力は貴重な歴史書を生む力となった。しかし著述のそとにおけるブロックの活躍も同時に無視することができない。彼は偉大な情熱と統率力の持ち主でもあった。そしてこの天分は彼をフランス史学界の中心的な指導者として成功せしめた。彼はあらゆる機会に書評を通じ、指導を惜しまなかった。すべての研究者に対する友情は彼の批判に説得力を与えた。彼はつねに厳正な審判官となったが、容易に協力者に転化した。彼の書評はきわめて同情的で、未知の人々とも親交を結ぶ重大な掛橋となった。彼はたえず指導し、決して忘れなかった。彼は英才の発見を好み、これら英才を研究の正しい方向へ導いた。この精神は彼の主宰する雑誌を歴史家たちの連絡の場[一九]たらしめた。俊秀は蝟集し、やがてそこは歴史研究のための一方の拠点となっていった。研究者としてばかりでなく、指導者として傑出していたという意味で、ブロックこそ真の学者であったといわなければならないであろう。

しかし彼において書評は、後進を指導するための単なる手段に終っていない。例えば農業史家としてのブロックの思想の展開は、年鑑[二〇]のすみに種々な表題で現われた短かい書評によって知ることができる。同僚のドゥーヴェルニュたちが、ブロックの農村史の主著の補足版のための素材を見出したのも、実にこれらの書評を通じてであったことを銘記すべきであろう。またそれらの書評は、些細な問題についても決してゆるがせにしないブロックの旺盛な研究心を示す恰好な材料となるに違いない。

（一）ブロックに完全な著作目録はない。わずかに Febvre, L. Mémori al des années 1939-1945, p. 190-193 の簡単な目録が参考になる。

（二）Les rois thaumaturges. Étude sur le caractère surnaturel attribué à la puissance royale, particulièrement en France et en Angleterre, Strasbourg, 1924, VII-542 p., 4 pl. (Publications de la Faculté des lettres de Strasbourg, N° 19).

（三）Les colliberti. Étude sur la formation de la classe servile (Revue historique, t. CLVII. 1928, p. 1-41, 161-178).

（四）Un problème d'histoire comparaée. La ministérialité en France et en Allemagne (Revue historique de droit français et étranger, 1926, p. 46-91).

（五）Liberté et servitude personnelles au moyen âge, particulièrement en France (Anuario de Historia del Derecho español, 1933, 101 p.).

（六）Les caractères originaux de l'histoire rurale française, Oslo, 1931, XVIII-265 p., 18 pl. なお一九五二年には、フェーヴルの序文が付され、新版が刊行された。

（七）Annales d'histoire sociale, 1945, I, p. 20参照。

（八）Les Caractères originaux de l'histoire rurale française, t. II; Supplément établi par R. Dauvergne d'après les travaux de l'auteur (Paris, Libraire Armand Colin, 1956). そこではブロック自身もし再版を刊行することができたならば加えたであろう補足と改訂が、一九三〇年以来

年鑑に発表された彼の論稿を基礎として試みられている。とくに領主制度・農村共同体・農業制度・耕地形態・輪作の部分は詳細にもひとしかった。その詳細は別の機会に譲りたい。

（九）La lutte pour l'individualisme agraire dans la France du XVIIIe siècle (Annales d'histoire économique et sociale, 1930, p. 329–383, 511–556).

（一〇）The Rise of Dependent Cultivation and Seignorial Institutions (Cambridge Economic History of Europe, t. I, p. 224–277).

（一一）La société féodale, t. 1: La formation des liens de dépendance, II: Les classes et le gouvernement des hommes, Paris, 1939, 1940, XXV–472 p., 4 pl. XVII–287 p., 8 pl.

（一二）中世の金融については Le problème de l'or au moyen âge (Annales d'histoire économique et sociale, 1933, p. 1–34). そして技術については Avènement et conquètes du moulin à eau (Annales d'histoire économique et sociale, 1935, p. 538–563), Technique et évolution sociale. A propos de l'histoire de l'attelage et de celle de l'esclavage (Revue de synthèse historique, t. XLII, 1926, p. 93–99), Les inventions médiévales (Annales d'histoire économique et sociale, 1935, p. 634–644).

（一三）L'Empire et l'idée d'Empire sous les Hohenstaufen (Revue des cours et conférences, 30e année, 2e série, 1928–1929, p. 481–494, 577–589, 759–768).

（一四）Revue historique, t. CLVIII, 1928, p. 108–158; t. CLXIII, 1930, p. 331–373; t. CLXIV, 1930, p. 134–160; t. CLXIX, 1932, p. 615–655; t. CLXX, 1932, p. 62–101; t. CLXXXI, 1937, p. 405–458; t. CLXXXIV, 1938, p. 79–121, 146–190.

（一五）Revue historique, t. CLXXXIV, 1938, p. 190.

（一六）Pour une histoire camparée des sociétés européennes (Revue de synthése historique, t. XLVI, 1928, p. 15–50).

（一七）死後この著作はフェーヴルにより整理され、一九四九年 Apologie pour l'histoire ou Métier d' historien として刊行された。讃井氏による訳業がある。なおそこで展開された思想の芽は既に一九三七年の講演 Que demander à l'histoire ?(Centre polythechnicien d'études économique, Bulletin n° 35 fevrier 1937, p. 15–22) のうちにあった。

（一八）L'étrange defaite. Témoignage écrit en 1940. Paris, 1946, XIX–194 p., 1 pl. 井上幸治氏の訳業がある。大体の内容を知るためには河野健二氏が「思想」に寄せた論稿が便利。

（一九）比較的長いものだけを Annales 誌に限って示せば、"La Vie rurale: problèmes de jadis et de nagcère", 2: 96–120 (1930), "Apropos d'un essai d'histoire regionale," 4: 73–77 (1932), "Régions naturelles et groupes sociaux," 4: 489–510(1932), "Sur quelques histories de villages," 5: 471–478 (1933), "Histoire rurale et statistiqu: à propos d'une étude sur la Côte-d'Or," 5: 492–494(1933), "Les Usages locaux; documents historiques," 5: 484–485 (1933), "Une Étude régionale: géographie ou histoire?" 6: 81–85(1934), Réflextions d' un historien sur quelques travaux de toponymie," 6: 252–260 (1934), "Champs et villages," 6: 467–489 (1934), "En Angleterre, rien quén Angleterre" 7: 320–323 (1935), "Les Paysages agraires: essai de mise au point," 8: 256–277 (1936): "Apologie pour le travail utile" 9: 80–85(1937), "Géographie historique, toponymie et cartographie." 9: 208–212 (1937) 等。

III

ブロックの業績を価値あらしめたのは、歴史を科学にまでたかめようとする彼の努力であった。歴史に対し彼は対象として人間の研究を割当てた。[二〇] しかし社会の生活者としての人間であって、彼はこれを複雑なままにおいてとらえようとした。政治人、経済人、宗教人というような生命のないものを考えることには反対であった。彼は歴史家に対しすぐれて実証的な精神を要求する。しかしそれはもの知りたらんとすることと違う。ブロックによれば、史料の背後に生きた現実をとらえることのできる人々のみが歴史家と呼ぶにふさわしい。[二一] 具体的なものについて判断することが歴史家の特徴である。以上、人間のかわりに社会集団を考えることはより適切であった。

そして歴史は時間のなかの社会集団を研究し、[二二] 社会集団に起った構造的変化をとらえようとする。しかし歴史家に価値判断が禁じられなければならない以上、[二三] この変化を評価するためではなく、それを説明するため、原因を明確にするためであった。結局において歴史は、持続のなかの人間社会に起った変化についての学問と定義することができる。[二四] しばしば歴史は過去についての学問と定義されたが、ブロックはこの定義に強く反対した。過去と歴史家との間に介在する現在という時間を持続のなかで切り離して考えることに彼は反対であった。歴史家に対し彼は、その研究を現在にまで拡大するよう要請した。事実において現在はその説明を遠い過去のうちに見出し、[二五] また逆に、過去を理解するためには、現実社会のなかでおこなわれる生活についての知識をそなえていなければならなかったからである。[二六]

歴史家が任務として歴史的事実を説明し、また社会構造に起った変化の原因を追究することに何の異存もない。しかしそのために歴史家の用いる方法については問題があった。ブロックがフェーヴル

と共同の仕事に乗り出したとき、まっ先に考えたのはこの問題であった。そこでは何よりもまず、常識や興味に訴える方法が危険なものとして斥けられた。ブロックは、社会が、我々によってもっとも合理的もしくはもっとも有利と判断される態度を持つとは考えない。むしろ進んで、我々に固有な精神の状態から過去の社会を敷衍することをいましめさえした。ブロックに従えば、歴史家は、外部からではなく、内部から、過去の社会の研究に立ち向うべきであった。社会と対決して歴史家が社会を説明する方法を考えるとき、これは第一に念頭に置かるべき点であった。

他方において歴史家は、ローマ世界とゲルマン世界の接触から出てきた中世のように、二つの違った伝統から生れた社会に対決させられる。そしてきまって、二つの伝統のいずれか一方に新しい制度の起源を求めるよう誘惑される。すなわち起源によって説明しようとする立場であった。これに対しブロックは、かかる態度が何の利益ももたらさないことを強調する。彼に従えば、あらゆる社会は、変化の過程のなかで、それ自体のうちに創造的な力を見出す。もし封建制がローマ起源かゲルマン起源であると主張するならば、それは生活の創造的進化を忘れた者の言であった。ブロックは、「人間はその父よりも時代によく似る」と教えたアラブの諺を信じて疑わない。歴史家が対決すべき社会を、他方において、ブロックはこのようなものとして考えた。

歴史家が立ち向うべき社会がかかるものである以上、ブロックによれば、歴史の研究に臨んで必要な態度は、人間に関連のある種々な学問の密接な協力を求めることであった。歴史は社会的人間を、複雑なままにおいてとらえようとするのであるから、人間についての学問のどれか一つだけに頼って、考古学・地理学・社会学・言語学の成果によらないならば、目的に達することが困難であろう。人間的な歴史の到来がさまたげられたのは、ブロックによれば、人間に関連のある種々な学問に向って協力を求めなかったことによった。かくて人間に関する他の学問をひろく考慮にいれることは、ブロックにおいて歴史研究のいわば大前提と信ぜられた。

そしてこの大前提に立ってブロックは、歴史研究に好都合な二つの方法を示した。すなわち時間については溯行法を、場所については比較法をと彼はいった。溯行法をブロックは農業史の研究において大いに利用した。現在の資料ないし状態の研究から出発して、史料の乏しい時代の状況を類推しようというのであった。しかし彼がこの方法に全幅の信頼を寄せていたわけではない。ひどく遠い過去について、現在の制度から類推しようという人々に対し、彼はその危険なことを警告した。溯行法に頼りながら、つねに彼はその限界を忘れない。ブロックによれば、保守的といわれる農村を含め、社会を支配する法則は依然として変化の法則であった。そして、溯行法を適用する場合、この法則がたえず念頭におかるべきだとした。

また比較することによって、二つの社会制度の間の類似点をとらえることが可能となる。類似点があることは、二つの制度が同一の

原因で起り、そして同一の社会環境のなかで発展したことを示す。しかし比較史の立場をとることによって、二つの社会制度のあいだの相違を知ることは、類似点を見出すことよりも歴史家にとって更に重要であった。前述したごとくブロックは、比較法を封建社会の研究において大々的に利用していた。すなわち彼はこの二巻の著書で、領主制を共通の基盤として各国に成立をみた封建制度なるものが、その後において国によりいかなる発展の経過をたどったかをさぐろうとしたのであった。知られるごとく、発展は或る国でとまった。或る国ではおくれた。またしばしば発展は違った制度を生んだ。そしてこの相違の起ってきた原因こそが、ブロックによれば、歴史研究で究明されるべき点であった。比較史の立場は問題の所在を示し、研究を正しい方向に導くものと彼は信じた。

しかし単に比較法は、共通の幹から出た二つの制度のあいだに起った相違をブロックに気づかせたばかりではなかった。歴史の事実を比較することによって彼は、同一の原因があれば、場所と時間にかかわりなく同一の結果を再現することができるという信念に達した。通貨膨脹はいかなる場合にも同一の結果をともなった。労働力の不足はいかなる時代にも技術の改良を生む。二十世紀に企業が繁栄した事情は、ウェルザー家やフッガー家の致富の事情と同一であった。[八] 彼が歴史の研究において決定論に立つようになったのは、比較史の立場を歴史研究の重要な方法と信じていたことによった。

疑いもなくブロックの決定論は、自然の諸現象を支配する決定論一般と違う。また彼の決定論は、社会の経済生活において好況と不況が交互に規則正しく起るとする決定論とも違った。[九] 知られるごとくブロックは、或る原因が或る結果をきまって起すに違いないこと、従って原因を知れば、それにより起る結果はおのずから明白であると考えるのである。しかし彼のこの決定論は、「あらゆる条件が等しければ」、或る現象を再現することができるという信念にまでたかめられる可能性を持っていた。[一〇] 歴史は社会の型とその成立の条件を決定することができるとブロックは本気で考えた。長い研究のほとんど最後においてブロックが歴史における偶然の役割を再認識するようになったのは、彼がかかる決定論に立つ限り、当然の帰結といわなければならないのである。

（一） Métier d'historien, chap. 1. p. 5.「事実、はやくよりミシュレーやフステル・ドウ・クーランジュのような偉大な先学たちは、歴史の対象が人間であることを教えた。むしろ人間たちといおう。」

（二） Métier d'historien, chap. 1, p. 5.「目に見える景色のうしろに、道具や機械のうしろに、外見はもっとも冷酷な記述や一見建築者とまったく関係のない建造物のうしろに、歴史家が知ろうとするのは人間たちである。それができない者は知識の人足にしか過ぎない。完全な歴史家はみずからを伝説の食人鬼にたとえる。人間の肉を嗅ぎつけたところに歴史家は獲物の

あることを知る。」

（三） Métier d'historien, chap.I, p. 7.「人間たちについての学問と我々はいった。まだ非常に曖昧である。『時間のなかの人間たち』と加えねばならない。歴史家は『人間』だけ考えない。歴史家の思想が呼吸する場所は接続のうちにある。」

（四） Centre polytechnicien, 1937, p. 19.「歴史家である以上、私は価値判断を引受けない。」

（五） Centre polytechnicien, 1937, p. 18.「おそらく歴史についてこれ以上によい定義はないであろう。歴史は変化についての学問であり、多くの場合、相違についての学問である。」

（六） Métier d'historien, chap. I, p. 18.「今日歴史家の或る者は現在と過去を切離して考えない。ミシュレーの言葉をおもえ。『現在だけにしておこうとする者は、現実において、実際を理解することができない』と。」

（七） ピレンヌの教訓はよくこのことを示している。かつてブロックがピレンヌとストックホルムに旅行したとき、ピレンヌは彼に「最初に何をみにいこう。新しい市庁舎ができたという話だ。それからはじめよう」といい、更に「もし私が好事家なら古いものだけみるだろう。しかし私は歴史家です」と加えた。Métier d'historien, Chap. I, p. 23 参照。

（八） 類似の記述については Centre polytechnicien, 1937, p. 20 参照。

（九） この点はブロックのシミアン批判にうかがえる。Le salaire et les fluctuations économiques à longue période (Revue historique, t. CLXXIII, 1934, p. 1-31) 参照。

（一〇） Centre polytechnicien, 1937, p. 19.

四

次にブロックに対する思想的影響を考えてみよう。[一] 彼の諸著作において特徴的な比較史の立場を、彼が言語学から学んだことについては前述した。なお彼が農業史の研究で、同じ型の耕地が多くみられる地方を他と区別するために線を引いたことは、言語学で方言の分布を示す線を引く考え方によった。また、実地と深い関連を保つため調査旅行を主張する地理学から、彼は実証の精神を学んだ。従って地理学は彼の思想形成に大きく作用したとみなければならない。[二]

しかしブロックの思想に影響したすべての学問のうちで、もっとも重要な作用を果したのはデュルケームの社会学であった。社会学から彼は歴史に対する彼の理解を支配した社会集合という概念と、社会事実の研究法を学んだ。彼に集合表象の説得力を教え、また常識を基礎とした議論に対し彼に注意したのは社会学である。[三] 歴史は彼の体系のなかで、時間の概念に非常な重要性を付した社会学の姿をとった。ブロック自身「社会学者と歴史家、私はこの二つの言葉のあいだに溝がないと信ずる者の一人である」といっている。[四] 彼が歴史の研究において社会を前面に押し出していることは、経済と政治に対する彼の位置づけをみるときもっとはっきりするであろう。

誰よりもブロックは、経済を知ることなしに社会を研究することの無益なことを知っていた。また歴史の研究において社会を経済と関連させて考えようとする点で、彼は他に劣らない。ブロックは中世の金融史に本気で取組んでいた。[五] そして経済への関心は、彼がオーゼの後任としてソルボンヌに着任していよいよ深まった。彼は歴史における経済の役割を重視した。経済史研究所の設置はその証明となる。しかし彼の著作のなかに史的唯物論をみることはできない。[六] 彼が経済を研究するのは、その成果によって社会史の理解を深めんがためであった。例えば彼が支払手段の歴史に関心を寄せたのは、その手段が階級により違ったという事情によった。[七] いかなる場合にも彼は社会が経済によって拘束を受けるとは考えなかった。[八]

知られるごとく、ブロックにおいては経済的要因が重視された。これに反し彼は政治的要因に対していささかの重要性も与えようとしない。彼は政治史を中心に歴史の教育を進めていく傾向をうれいさえした。[九] 領主制の起源について彼は政治特権の役割を重くみない。進んで彼は、「政治」という言葉のうしろに、支配者だけでなく、これら支配者により行動を律せられる社会集団を考えるよう提案した。[一〇] そして彼によれば、政治が社会集団のなかに滲透していくのは、社会集団の意向と矛盾しない限りであった。[一一] 彼の場合、社会はつねに前面に出た。

経済の過程が多くの要因によって起るのに対し、政治の過程では個人の行動が決定的な意味を持つ。ここにいたって歴史における個人の役割の問題が提起される。ブロックの研究では社会集団を対象とし、個人は歴史に偶然と不合理を持込むもの、不可知のものとして排除された。[一二] それは一種の決定論の立場であった。とはいえ彼が歴史のなかに個人を持込むこともあった。彼は瘰癧の治療法についての信心が一つの習慣にまでなったことを若干の王に帰した。ドイツでは王にそのような努力がなかったため、この習慣を欠いた。[一三] 一つはそのような立論の場合であった。また彼が個人を持込む他の場合は、どうにもならない力によって決定される歴史的発展に直面して個人はまったく無力であるとし、全国民が市民としての義務を怠ったときに書かれた著作においてであった。[一四] この運命論に対して、彼は個人が、それにふりかかる障碍に抗し、社会を自由な方向に動かすことができると反論した。ブロックは個人の役割を認めた。しかもその二つの場合は、知られるごとく、奇しくも、彼が本格的な研究に入る寸前の著書と、晩年のほとんど最後の著書であった。終始決定論に立ちながら、研究の最後で彼は、偶然的要素を認める最初の立場にもどったのであった。

ブロックに対する思想的影響について触れて、更にここで、彼を歴史研究に向わせた力について考えることは適当であろう。結局において彼を歴史研究に駆り立てた力は先輩たちの歴史態度のうちにあった。ブロックがラングロワやセニョーボから引用するのは、この先輩たちに対する感謝を示すためばかりでなく、同時にこの先輩

たちからいかに遠く離れているかを明確にするためであった。そして新しい歴史のために彼が交替を迫ったのは、実にこれら先輩たちによってとられていた研究態度であった。彼等は第一に「技巧」と教えた。しかしブロックは何よりも「巧みにつくられた」歴史を排撃した。「技巧」に対しブロックは「探索」を選んだ。過去の人間たちをよりよく理解するためには証拠について研究することが疑いもなく重要である。しかし証拠から真実を引出すことはもっと重要である。ラングロワとセニョーボは歴史の研究においてこれを忘れた。ただ巧妙にまとめることに腐心し、その術を教えたのみであった。彼等は問題を提起する術を忘れた。ブロックの教えたのは彼等の忘れたまさにこの点であった。歴史家ブロックの誕生は何よりもフランス歴史学の伝統のなかからのみよりよく説明されることを思うべきである。

(一) 父のほか、若きブロックが個人的な感化を受けた先生には中世史家のローがあった。マルクスとピレンヌから受けた学恩も大である。特にマルクスの分析規角に対し彼は最大の敬意を捧げた。L'étrange defaite, p. 170. また彼の共同者フェーヴルからの影響も無視し難い。これについては Annales d'histoire sociale, 1945, t. I. p. 32 のブロック自身の言葉を参照。

(二) Baulig, H. Marc Bloch géographe (Annales d'histoire sociale, 1945, t. II, p. 5-12).

(三) ブロックは知識の基本を Année sociologique から得たことを告白している。これについては Revue historique, t. CLXXIII, 1934, p. 2 参照。

(四) Revue historique, t. CLXXIII, 1934, p. 5.

(五) 不幸にしてその成果はまとめられずにしまった。死後その遺稿をもとに編集された一九五四年の著書 Esquisse d'une Histoire monétaire de l'Europe, 96 p. は彼の構想の一端をしのばせる。

(六) この点についてはとくに Technique et évolution sociale. A propos de l'histoire de l'attelage et de celle de l'esclavage (Revue de synthèse historique, t. XLI, 1926, p. 93-99) が重要。ブロックは、中世盛期にみられる繋駕法の改良が西ヨーロッパ社会における奴隷不足によるとは考えない。またブロックによれば、奴隷の不足はキリスト教の普及で奴隷を西ヨーロッパ以外に求めなければならなくなったという事情によった。

(七) Annales d'histoire économique et sociale, 1933, p. 32.

(八) L'étrange defaite, p. 189.

(九) L'étrange defaite, p. 173.

(一〇) Annales d'histoire économique et sociale, 1934, p 473-474.

(一一) Les rois thaumaturages, p. 250-259. 法王は国王の超自然的な権能についての信仰をなくすことができなかった。しかし司祭の独身についての教義は、一般の信仰と合致したため、無理にも通すことができた。

(一二) 重要な例は La société féodale にみられる。あらゆる個人的要素がそこでは排除され、一人の封建領主の姿も出てこない。

(一三) 前掲の Les rois thaumaturages.

(一四) 前出の L'étrange défaite.

五

歴史家ブロックについて触れただけで、彼の市民としての英雄的行為をかえりみないならば、片手落ちになるであろう。フランスの敗北で彼は南仏に難を避けたが、ナチの横暴はこの歴史家に安穏をきめこむことを許さなかった。一九四三年ブロックは家族と別れて単身リヨンにおもむき、レジスタンスに加わり、そのすぐれた組織力によって重要な役割を果した。[一] しかし一九四四年には逮捕され、非常な虐待を受けた。彼は獄中にあっても衰えず、同志に対し祖国の歴史を語り、愛国心を鼓舞した。このことは彼の死期をはやめた。苛烈な拷問の後に彼は獄から引出され、他の同志と共に銃殺された。逮捕の年の六月のことであった。[二]

ブロックは倒れた。しかも学問的になお多くのものを期待することができる歳であった。事実において多くの著作がのこされた。彼にとって、すべての研究が新しい研究のための出発点となった感が深い。知られるごとく、業績は多面にわたり、しかもいずれも、彼を偉大な歴史家の列に加わらしめるに足る豊かな内容のものであった。それらを通じてブロックは、歴史研究がいかにあるべきかを示した。現在のよりよき理解のための歴史の研究という態度と、それを果すに必要な緻密の精神は、とくにブロックの強調したところで、歴史を研究する者の間に強い影響をのこしているのである。

注(一) レジスタンスにおけるブロックの活躍については Altman, G. Au temps de la clandestinite: notre《Narbonne》de la Résistance (Annales d'histoire sociale, 1945, t. 1, p. 11-14) と、L'étrange défaite に寄せた Altman の序文 p. IX-XIV を参照。

(二) ブロックの最後の模様は Fèbvre, L. Mémorial de 1939—1945, p. 189 にくわしい。